
『普通』【短編・文学】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『普通』 【短編・文学】

【Nコード】

N2795Q

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

家を出て街を歩くなかで、男に追われる事になった。そんな時助けてくれる人と出会い……。

『普通』 作：山田文公社

ネオンの光りに、辺りに漂うタバコの煙とお酒の香り。町中がそんな香りに包まれている。飾り立てた車が道を埋め、行き交う人々は足早に過ぎ去るか、真っ直ぐろくに歩けないほど右へ左へジグザグに進んでいる。そんな人々が行き交う中を生まれて初めて夜の街で過ごした。不安で心細いかと思いきや、慣れれば街は楽しくて、夜はあつという間に過ぎていき、すぐに朝が来て祭りが終わった後のように街から人はいなくなる。

夜の街はにぎやかで、とても楽しかった。街にはいろんな奴がいて、なかには泊めてくれる奴や食事をおごってくれる奴もいた。同性異性問わずに仲良くなった。顔見知りもできて長話できるほどだった。でも時々自宅の番号が着信履歴に顔を覗かせて、すこぶる不快にさせた。そんな時は見つけ次第消去して、カラオケで叫んでつまらない家の事を頭から追い出した。

きっかけは些細な事だった。些細な喧嘩は長年溜め込んだ不満を爆発させて、私は怒りにまかせて荷物をまとめて家を飛び出した。家を出たのは春頃だった。あれから半年経った事になる。でも案外そんななかでも生きてこれた。

そんななかで自分と同じ境遇の奴にも会ったりした。泊めてもらったけど犯された奴や、所持品全部盗まれて山に捨てられた奴、何故か借金ができて風俗で働く奴もいた。悲惨だけど楽しそうに話していた。そんな目にあっても家よりも、街の方が良いって奴らだった。

私は正直そんな目に遭っても街にいられる自信は無かった。幸いにもいい人ばかりに恵まれていた。でも少し舐めている部分もあった。男なんか股間を蹴り上げたらそれで終わり、って舐めて考えて

いた。父が交通事故を起こした時の言葉だけど『慣れた頃が一番怖い』と言い鞭打ちを起こした首をさすりながら、しみじみと言ったのを思い出す。

そう『慣れた頃が一番怖い』のだ。私はホテルから飛び出して夜の街を走っていた。ヤクザ崩れの男が私を追ってくる。駅で座っていた私に声をかけてきた悪そうな男、やはり泊めるだけというのは嘘だった。ホテルの部屋に入るなり男は豹変した。身の危険を感じて上手く逃げ出したが、こうして追われる事になった。商業ビルの物陰に姿を隠していると、さっきの男が携帯片手に誰かと話しながら近付いてくる。

「ああ、たぶん高校生ぐらいだな、薬打つ前に逃げ出しやがって、写メ送ったから見つけたら事務所に連れてこい」

男の声が背後から聞こえてくる、私は心臓の音がまわりに聞こえるんじゃないかと思うほどに大きく鼓動をならしていた。自分の右手で自分の口を押さえる。気を抜いたら悲鳴だか呻き声だかが漏れてしまいそうで怖かった。

「おい！出てこい！！」

何かが蹴飛ばされる音がした。気づかれたと思い私はこっそり男の方を見ると、男は見当ちがいの場所に怒鳴っていた。男は視界から消えて路地の奥へと進んで行った。

「隠れてないで、出てこい！！」

また派手な音がして、何かが崩れて壊れる音がした。

「すいません、悪気は無かったです！」

情けない男の声が叫びながら謝った。

「なんだお前？！」

男の怒声と崩れる音と悲鳴が聞こえた。私はこっそり立ち上がり、路地から覗くとヤクザ崩れの男と血まみれのサラリーマン風の男がいた。そしてサラリーマン風の男が私に気づき、助けを求めて叫ぶと、ヤクザ風の男もこちらを振り返った。無論私はその前に逃げ出したが、タイミング悪く見つかってしまい、また男に追われる事に

なった。私は走りまわった。しかも最悪な事に男の仲間にも追われた。

そしてまた商業ビルの路地に隠れる事になった。私はビールケースが積まれた脇に座って隠れていると、派手なメイクと衣装を身につけた女が私に声をかけてきた。

ささがわ りえ
「笹川理恵さん？」

私は彼女の事を知らなかったが、彼女はどうかやら私の事を知っているらしく、私のフルネームを知って問いかけてきた。

「ええ、そうです」

私が素直に頷いて答えると、彼女は、ぽんと手を打った。

「もしかして……逃げてる？」

彼女の伺うような顔が妙に印象的で、私は同姓ながらも可愛いと思った。

「はい……あのどちらかでお会いしました？」

私が恐る恐る尋ねると彼女は携帯を取り出して、首を振った。

「ゴメンね、私は野際佐恵子のぎわ さえこじつは元彼のメールが来たから……これ」

そう言い佐恵子は私に携帯を見せた。そこには私の学生証が映っていた。

「え、どうして？」

私が携帯を喰いいるように見ていると、彼女はあたりを伺い手招きし私を連れてスナックの一室へと入った。そこは小さな5人掛けのカウンターと脇に4人掛けのテーブルがひとつ置かれていた。

「今日はお店ないけど、良かったら好きな所に掛けて」

そう言い佐恵子はカウンター側にまわり、片づけを始めた。

「この店小さいけど私の店だから、ゆっくりして」

そついい佐恵子は私の座るテーブルの前に水を置いた。

「店のおごり……うそウソ、ただの水だから心配しないで飲んで」

佐恵子は笑いながら手を勧めるようにしたので、私はグラスを手に取り、大きく傾けて水を飲んでから息を落ち着かせた。

「あなたを追っている男って私の元彼で谷下俊^{たにしたしゅん}って名前で、彼は品川会の若頭なの……つまり本物のヤクザで若社長ってところかな」

口に含んだ水が喉につつかえて、飲み込むと音がした。

「大丈夫、もう俊とは彼とは何も関係ないから安心して」

私は水を飲み干したあと、佐恵子に質問した。

「もし、もしもの話だけど……捕まったらどうなるかな？」

佐恵子は首を傾げながら考え込むと、重い口を開いた。

「結構えぐい話だけど、薬漬けにしてからビデオに録画して、それを裏で売りさばきながら、ビデオを脅して自分の店で散々働かせて使い物にならなくなったら捨てるって感じかしら」

私は佐恵子の話を聞いて下唇を噛みしめた。

「最悪の話だから、でも風俗で働かされたり、薬を打たれたりするかもね……」

そう言い佐恵子は赤い七分袖をめくって私に見せた。そこにはおびただしい注射痕と縫った傷跡があった。

「私みたいだね」

佐恵子は力なく笑い、捲った袖を戻した。

「大丈夫、明日になったた家に帰れば問題ない、街にいればそのうち捕まるけどね」

家に帰る……とふと想像出来る範囲で考えた。確かに酷い目に遭ってまで街にいる理由はない。しかしできれば家には二度と帰らない。私が黙り込んだのを見て佐恵子は、いい提案をしてくれた。

「なら、家に泊まる？ 家事炊事してくらたり、仕事手伝ってくれと助かるんだけど」

そう言い佐恵子は笑顔を見せた。私もその笑顔に答えて深く頭を下げてお願いした。

「是非、お願いします」

それから私は佐恵子の家に泊まりこむ事になった。部屋は散らかり放題で出し放しの散乱し放題だった。私は三日かけて片づけた。佐恵子が素直に喜んでくれたのが嬉しかった。今までも止まった家で色々としたが、ここまで本腰をいれて何かをする事はなかった。そして佐恵子のように喜んでくれる人もいなかった。

なんだか世話の焼ける姉ができたような気分では楽しかった。追われていた事もすっかり忘れて、佐恵子の服を借りて店に手伝いまでするようになった。そう私はまたもすっかり慣れきってしまった。

ある日の事、谷下が店にやってきた。私は運良く店奥に居たので顔を会わせる事は無かったけど、佐恵子と話す声だけが聞こえてきた。

「おい、金」

グラスを乱暴にテーブルに置く音が聞こえた。

「もう、あんたとは切れたんだから、お金はださない」

佐恵子はきつぱりと断ると、グラスが割れる音がした。

「お前誰に向かって口聞いているんだ、ああ？ 舐めると殺すぞ」

そう言いグラスが割れる音と鈍い打ち付ける音が聞こえた。

「そう言えば……メール来ただろ？」

「見たわよ可愛い子ね、彼女がどうしたの？」

「見かけたら連絡しろって書いてあったよな？」

鈍い音が響くと、佐恵子の呻き声がした。

「ええ、そう書いてあった」

「じゃあ、何故連絡よこさないんだ？」

私は心臓をわしづかみにされた気分だった。谷下は私が隠れている事を知っていた。

「誰も、いない」

鈍い大きな音がした。見なくても佐恵子の頭が打ち付けられる音

だとわかる。

「いつから、お前俺にウソをつくようになったんだ？ それとも俺を舐めて馬鹿にしてるのか？」

頭を数回打ち付ける音と、鈍い音が響いた。私は耳を塞いでその場に座り込んだ。

「おい、ガキ奥に隠れてないで出て来いよ」

「だから、誰もいないって……」

鈍い音がして、佐恵子の声が止まった。

「出てこい！！」

ガラスが割れる音と谷下の怒声が響いた。私はこわばった体を動かして奥から顔を出した。すると目を見開いた谷下が佐恵子の頭をわしづかみにして、テーブルに押さえこんでいた。

「手間かけさせやがって」

そう言うつと谷下は佐恵子を離して、私を捕まえた。私が抵抗すると谷下は私の腹を蹴り上げた。咳き込んで動けなくなる私を谷下は乱暴に腕をひっぱりつれてビルの階段を折り始めると。

走って降りてきた佐恵子が包丁を手にして、鬼のような形相で階段の上に立っていた。

「待ちなさい！！」

すると、谷下は目を剥いて佐恵子を見た。

「お前口のききかたを教えないとわからないようだな？」

「うるさい、彼女を離せ」

「てめえ、なに調子にのつてやがるんだ？」

「離せ！」

佐恵子が包丁を突き出して階段を下りてくるのなか谷下は懷から拳銃を取り出して、引き金を引いた。何発か銃声になり響くと、佐恵子は谷下の懷に飛び込んだ。

たぶん私は叫んだと思う。何発か銃声が鳴り響き、谷下は胸に包丁を突き立てて階段の下で仰向けになって倒れている。それを見下

るすような位置で階段に仰向けになって座っている佐恵子に近付いた。

「大丈夫？」

私は佐恵子の隣に座って体を撫でると、手に血が付いた。佐恵子は大きく咳き込みながらゆっくりと答えた。

「きつともう駄目」

そう言い佐恵子は笑った。私も笑い返す。

「私、理恵がなんだか妹みたいにおもっていた」

佐恵子が浅い息を繰り返して呟いた。

「私も佐恵子さんがお姉ちゃんみたいに思ってた」

私は佐恵子の手を強く握りながら、目を見て答えた。

「だから、助けなきゃって……思ったら体が動いてた」

佐恵子は首をあげて谷下を見た。

「ありがとう」

私は大きく頷いた。

「理恵はさ……まだ引き返せる、だから家に帰りなよ」

もう佐恵子の視線は私を見ていなかった。けど私は大きく頷いた。

「で、普通に学校行つてさ、たまに家に来て色々聞かせてよ、私はそついうの出来なかったからさ」

佐恵子は目を閉じた。

「理恵は普通に暮らしなよ……」

そう言い佐恵子の手から力がなくなった。

私がどれだけ強く握り締めても、佐恵子が握り返してくる事はなかった。

警察に色々と事情を聞かれたり、久々に親に平手打ちを喰らったり、お小言言われたり怒鳴られたり、泣かれて抱きしめられたり、色々あった。色々あって私はまた学校に通い始めた。自分だけが浮いているのが判った。それは家を出て色々と経験したからだった。自分が子供じゃ無くなったからだった。

私はときどき佐恵子の所に行き学校での出来事を報告する。血のつながらない姉は黙って聞いている。

「ねえ聞いている？」

冬の空が妙に寒々しいなかで、私は答えを待っている。

「そんなに私に恋人ができたのが気に入らないの？」

その言葉を聞いてようやく佐恵子言葉を返した。

「じゃあ今度家につれて来なさい」

私は笑って答えた。

図太い姉、佐恵子は銃弾を5発も喰らって生きていた。医者は奇跡だと目を丸くした。警察も正当防衛で片を付けるつもりだったよ
うで、あまり突っ込んで聞いては来なかった。2ヶ月で驚異の回復で退院した佐恵子だった。

「はいはい、じゃあちゃんと見てね、お姉ちゃん」

私がそう言うと、佐恵子は笑って頷き答えるのだった。たぶん見知らぬ人が見れば、私達は普通に仲の良い姉妹に見えるだろう、そういう普通の姉妹に……でも普通じゃない繋がりがある。普通の生活をしていたら、きっと私は佐恵子と出会う事は無かった。

普通じゃない経験だった。異常かもしれない、けれどこうして話しているのは普通の事、普通ってなんだろう？普通に暮らしているってなんだろう？私は街をふらつきながら生きてた頃を思いだして考えた。佐恵子の生き方だって普通じゃないし、私も決して普通ではない。けれど普通に生きている。

私は普通の暮らしに戻った。でも、私は既に普通じゃない。

ふと、普通という幻想なんだと気づいた。皆誰もが普通にあこがれている。でも普通は作られた幻想だと私は気づいたのだ。ただ認めたくないから普通という幻想を作りだして、そこに隠れようとしている。

誰もが一人一人違っている。それが本来正常なんだ。決して誰もが同じ生き方をして同じ考えをするのが正常であり、それが普通と

いう事。そう考える事が異常だということは誰も口にしない。

でもまた家出して街に戻りたいかと問われたら、二度と戻りたくない。おかしい事かもしれないけど、もしかしたら普通とは楽な生き方を示しているのかもしれない。それぞれの普通。一人一人違う普通がある。私の普通は誰とも違う、それは母の普通とも違うし、佐恵子の普通とも違う、クラスメイトの誰とも違う。

だからそれはきっと私なりの普通。

彼氏を姉の家へと連れて行く。姉はどう評価を下すのだろうか、地味な彼をどう評するだろうか、私は少し緊張しながら姉の家のドアを開けた。昨日片づけたのを散らかして無いことを祈りつつ、私は声を掛けた。

「お姉ちゃん連れて来たよー！」

(後書き)

お読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2795q/>

『普通』【短編・文学】

2011年1月20日02時40分発行